

まるやまおうきよ

円山応挙 から近代京都画壇へ

東京藝術大学・大学美術館本館（上野公園） 前期後期で展示替えあり

前期 2019. 08. 03～09. 01

後期 2019. 09. 03～09. 29

京都国立近代美術館 2019. 11. 02～12. 15



「円山応挙」(1733～1795)は、京都画壇に君臨した巨匠で、伝統の技法を体得し精密な筆致による「写生画」という、新画法で日本絵画史に革命を起こした天才絵師である。さらに、特筆すべきは多くの門弟を育て「円山派」を形成したことである。

本展は、日本美術史の中で要な位置を占める「円山四条派」が、いかに近代日本画へと継承されたのかを「写生画」の名手「円山応挙」とその弟子の「呉春」「竹内栖鳳」「上村松園」など、近世から近代へと引き継がれた画家たちの系譜を一挙に辿るといふ企画の展覧会である。

《松に孔雀図襖（部分）》 1795年 16面のうち紙本金地着色 重要文化財



画伯は1778年に大乗寺の障壁画として孔雀図襖を描いたが、完成間近に不慮の火災で焼失した。

本作品は、8年後に描かれた大乗寺客殿の仏間前絵室を飾る大作で、自然や花鳥に動物をいきいきと写し取った“写生”という画風で一世を風靡し、孔雀の羽や松の葉の写生に徹して一つ一つ丁寧に描かれている。金地の効果に墨のグラデーションや墨しか使わないのに赤みや緑を感じることができるのが特徴である。

《江口君図（えぐちきみず）》1794年 絹本着色



江口の遊女妙を白象に乗った普賢菩薩に見立てた「美人画」で、「江口の君」とは一般に江口の遊女を指している。

この能「江口」は、かつて「西行法師」と歌を詠み交わした江口の里の遊君が、実は「普賢菩薩」の化身であったという説話を出展とするもので、これを絵画化した作品である。

目もと涼やかで上品な女性が像の背に腰掛ける姿で、髪を結い上げた兵庫髷と体の前面で帯を結ぶ前帯は遊女風俗で、腰を下ろしているのは「普賢菩薩」が騎乗する白象である。